



TITLE:

<亀岡フィールドステーション>ほんまものいかだをつくる！：保津川筏復活プロジェクトの試み

AUTHOR(S):

河原林, 洋

CITATION:

河原林, 洋. <亀岡フィールドステーション>ほんまものいかだをつくる！：保津川筏復活プロジェクトの試み. 実践型地域研究最終報告書：ざいのち 2012: 187-210

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/155057>

RIGHT:

ほんまもののいかだをつくる！

—保津川筏復活プロジェクトの試み—

亀岡 FS 特任研究員 河原林 洋

はじめに ～私の保津川から～

私は亀岡（京都府亀岡市）、さらに言えば保津川でしか生きていけない。なぜなら、私は保津川下り¹の船士だからだ。観光業全般に言えるように、この仕事は、この土地でしか成立しないという物理的・精神的制約²がある。船士たちは保津川でしか生活の糧を得ることができない存在である。いわば、保津川は、船士のアイデンティティであり、私のアイデンティティでもある。

保津川は、自然と歴史豊かな川であると言われる。約 30 種類の淡水魚、多くの昆虫や鳥たちが生息し、今回紹介する筏流しを筆頭に約

1200 年続く水運の歴史を持った川である。また保津川・保津峡の景観は多くの観光客を魅了し、保津川下りの歴史は約 400 年絶えることなく続いている。これらは単純に自然的環境だけではない、自然と地域の人々の生活の関係性による「歴史的環境³」が育んできたものと言えるだろう。

しかし、私は、船士となった平成 10（1998）年頃から地域と保津川の関係性のあり方にアイデンティティの存続を揺るがす三つの危機感を感じていた。一つは、地域（地域住民）の保津川の自然環境への無関心である。保津川は増水を繰り返すたびに、流域から多くのごみが流入する。その集積地が立地上、保津峡となる。その様を見た保津川下りの乗船客は一律に汚い川という感想を持つ。せっかくの保津峡の渓谷美が台無しである。しかし、そのごみを船士自体が掃除するかというとそうではなかった。掃除してもまた流れてくるといった一種あきらめた雰囲気があった⁴。また、その状況に対し、



写真 1 保津川下り 保津川遊船企業組合提供

¹ 保津川遊船企業組合（以下、遊船）が運営する亀岡市保津町と京都市嵯峨嵐山を結ぶ全長約 16km、所要時間約 2 時間の観光舟下りである。慶長 11（1606）年、嵯峨の豪商・角倉了以により保津川が開削され、舟運が可能となった。現在、年間約 30 万人の観光客が訪れる日本有数の観光舟下りである。

² 一般的に、人々が住む地域を選ぶ場合、通勤・通学といった物理的な理由や環境や公共サービスといった精神的な理由で選択されるであろう。隣町へと住む場所を変えても、通勤・通学時間が多少変わるくらいで、地域選択の必然性は大きくない。しかし、農林漁業といった第一次産業や伝統産業といった仕事を持つ人々や先祖代々住む人々は、物理的・精神的制約が大きく、地域選択は絶対的といえるであろう。

³ 歴史的環境とは、地域において、景観、風俗、習慣、様式、技術、価値観など、継承・発展してきたものの総称として使用する。地域住民のアイデンティティと言える。

⁴ 平成 19（2007）年、遊船内にエコグリーン環境対策委員会が設立され、漂着ごみの清掃や桜などの植樹等などの保津川の環境問題対策全般を行っている。遊船では、河川の増水後、定期的に河川清掃が行なわれている。平成 23（2011）年の台風 12 号後、10 月 11 日から 21 日にかけて延日数 7 日間、延人数 84 人で保津峡内の河川清掃が行われ、土嚢袋（20L）で約 1000 個、大型ごみ約 1 トン分のごみが回収された（遊船調べ）。

地域の人々も「自分の仕事場やから自分たちで掃除するのが当たり前」と他人事であった。増水のたびに汚れるのは当たり前、さらにはそのことさえ知らない人々が多いという図式が保津川には成立していた。

二つ目は、保津川の歴史・文化に対する地域の無関心である。地元の観光資源である保津川下りが400年の歴史を有することさえも知らない住民が私の周りには実に多く、保津川下りの歴史・文化、さらには保津川が育んできた水運に対する理解があまり見られなかった。さらには、当の保津川下り関係者でさえ、その歴史・文化を評価し、内外に発信することに躊躇していた。それは、高度成長時代やバブル時代の遺物であろうか、レジャー産業という位置づけを前面に出し、伝統産業という位置づけは無きに等しいものであった。

三つ目は、保津川と流域住民との距離である。保津川下りには年間約30万人、保津峡を走る嵯峨野観光鉄道には約90万人の観光客が訪れる。保津川は日本有数の観光地といっても過言ではないだろう。しかし、他地域から多くの人々が訪れるこの保津川に全く流域住民の姿が見られないのである。日本の川はどこでもそうであったが、かつて保津川では、子どもたちは、泳いだり、魚や虫を捕ったりして遊び、大人たちは、農業、漁労や水運で生活の糧を得ていた。生活の糧を得るといった物理的な恩恵があれば距離感は近くなり、保津川、さらには自然に対して楽しみ、感謝や畏怖といった精神的な恩恵があれば距離も近くなったのであろう。しかし、今では、多くの人々にとって、遊び場でも、生活の場でもない保津川は、物理的にも精神的にも遠い川となっている。一つ目と二つ目の危機は、三つ目の危機から起因しているということができる。

それでは、それら危機をどう捉え直したらいいだろうか。

1. 保津川の歴史的環境における筏流しの意義

地域ではほとんど誰も問題視していない保津川の歴史的環境の現状に、私が危機感を持つようになった背景のひとつに挙げられるのは、私が「よそもん」であるということである。私は「ウチ（＝地域）」ではなく「ソト（＝他地域）」から来た人間であり、「ウチ」ではあたり前であることが、「ソト」の人にとってはあたり前ではなかったのである。しかし、それらを「ウチ」の人々に理解してもらうことは難しい。ましてや「ソト」の人間の言葉に耳を傾ける人は少ない。

亀岡へ来て15年になるが、私は、ただひたすら「ソト」から「ウチ」の人間になろうとしていたのかもしれない。前述したように、保津川下りの仕事は、保津川でしか成り立たない。船頭業は、保津川と自己同一化して初めて成り立つ仕事と言える。「ソト」から来た私は、ひたすら「ウチ」＝保津川下りを通じて、「ウチ」＝亀岡＝地域なるものに近づこうとしていたともいえる。その過程の中で、保津川さらには地域の問題点を再認識することができたのかもしれない。

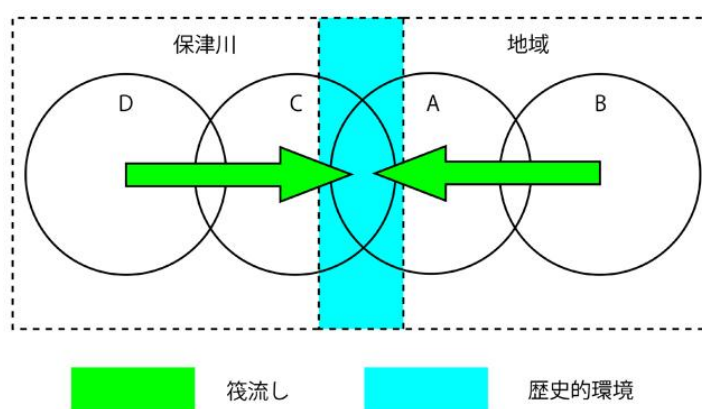


図1 「ウチ」と「ソト」の構造（筆者作成）

それでは、私的な（船士的な）問題を地域の共通の認識とすることは可能であるのか。そこで、問題となるのが、「ウチ」と「ソト」の三重構造である。一つは「ウチ」＝地域と「ソト」＝保津川という構造である。かつては地域の一部であった保津川が今では地域の関心の外となってしまう。二つ目は、前述した「ウチ」＝地域の人々＝A と「ソト」＝他地域からの人々＝B という構造で、一つ目の「ウチ」の中に存在する。さらに潜在化している構造が保津川内にある「ウチ」＝歴史的環境を重んじる船士＝C と「ソト」＝歴史的環境を軽んじる船士＝D という構造である。

私のアイデンティティと言える保津川の歴史的環境を存続させていくためには何が必要なのか。生活の糧を得ると言った物理的な恩恵が期待できない現在において、新たな産業を生み出すことは難しい。それならば、前述した保津川を通じて得られる楽しみや感謝といった精神的恩恵にターゲットを絞れないであろうか。私が、保津川下りを通じて、地域に近づこうとしたように、地域の人々を、なかによつて、保津川に近づけることはできないであろうか。そこで考えたのが、「保津川の筏流し」である。筏流しに着目したのは、筏流しが以下の4つの特性をもつからである。一つは、筏の地域性である。保津川の筏流しはこの地域固有のものである。二つ目はその歴史性であり、約1200年にわたって地域の産業と文化を育んできた。三つ目は、その連鎖性であり、地域の人やものを運び地域間の人やものをつないでいた。四つ目は、その真実性であり、筏さらには保津川の歴史と文化を今に伝えるものである。

保津川の筏流しを実際に体験することにおいて、その地域性と真実性は、体験を他の経験と差別化し、その価値を高め、その歴史性と連鎖性は、体験を共有化させる。筏流しの4つの特性を通じて、地域住民を保津川へと呼び戻し、新たな形で、新たな保津川の歴史的環境を育む方法、それが、今から紹介する京都・保津川で試みられている保津川筏復活プロジェクトである。それは「私」のアイデンティティを「私たち」のアイデンティティへと導く試みであるといえるであろう。

この論文では、保津川の筏流しの地域性、歴史性、連鎖性、真実性を浮き彫りにしながら新たな保津川の歴史的環境を育む試みを紹介し、その意義を考察していく。

2. 大堰川（保津川）とは

大堰川は、京都市左京区広河原と南丹市美山町佐々里を分かつ佐々里峠付近に発し、京都市右京区京北町を東西に流れ、南丹市日吉町の日吉ダムを經由し、亀岡盆地へと南流する。そして、この論文の舞台である亀岡市の中央部を縦断し、保津峡の険しい峡谷を練るように流れ、京都市嵯峨を経て、淀川と合流する。水源から淀川へと合流するまでの延長が約114kmの一級河川である。

大堰川は、6世紀頃大きな堰堤が築かれてから大堰川と呼ばれているが、明治29（1896）年の河川法施行後は行政上桂川という名称で統一されている。また現在でも流域ごとに川の呼

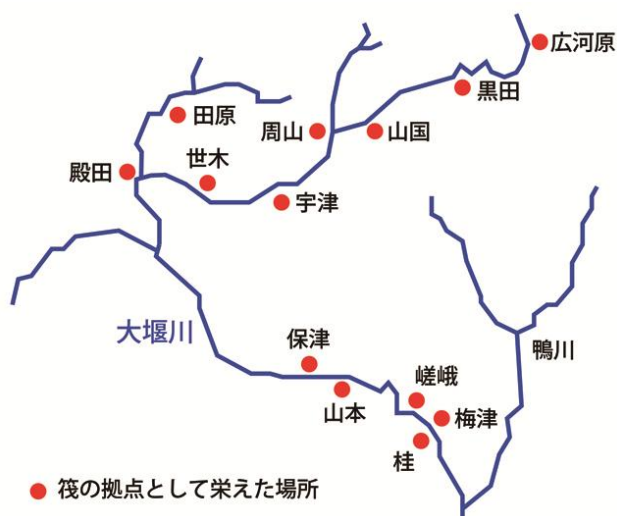


図2 大堰川流域図（1950年以前）筆者作成

称は分かれている。ここでは、桂川を全体で見る場合は、歴史的に長く使われてきた「大堰川」と、京北町を流れる流域を「上桂川」と、亀岡盆地から嵯峨嵐山までの区間では流域の呼称「保津川」と呼ぶこととする。

3. 大堰川（保津川）の筏の歴史

ここで簡単に大堰川の歴史をひも解いてみたい。大堰川の筏流しの歴史は古く、8世紀まで遡る。特に延暦3(784)年の長岡京造営、延暦13(794)年の平安京造営に際しては相当な資材が必要であり、丹波国山国庄（現在の京都市右京区京北町付近）が禁裏御料地に指定され、造営用材の供給地となった。そして、『延喜式』巻34「木工寮」の項には瀧額津（たきぬつ、現在の亀岡市保津町付近）から大井津（現在の京都市右京区嵯峨または梅津付近）までの筏の運賃などの記述が見られ、平安時代初期にはすでに、本格的な筏流しが成立していたことが推測される。中世にはこれらの津に「御間」（問丸）と呼ばれる筏の輸送業者が現れ、筏流しを専門とする筏士（筏師）が登場する。

近世に入り城郭や城下町の建設が盛んになると、木材の需要は急増した。丹波材の場合は、生産地である丹波の山々から京都・大坂などの消費地へ河川を通じての筏流しが可能であり、時の権力者も丹波材の輸送に欠かせない筏士の存在を重視した。特に羽柴（豊臣）秀吉は諸役（税）を免除する朱印状を与えるなどしてこれを支配した。江戸時代末頃から経済の発達にともなって輸送量も飛躍的に増加し、幕末から大正時代の最盛期には年間60～90万本もの材木が京都・大坂へと輸送された。また、材木の生産や輸送だけではなく、筏流しに関連した活動が各地で行われ、流域で暮らす人々が様々な形でこれらに携わり、筏の中継地として栄えた大堰川流域の村々は現在の丹波地方の基礎を形作り、京都・大坂の町と人々の暮らしを支えてきた。

古代から近世にかけて大きく栄えた大堰川の筏流しだが、明治・大正期の山陰本線の開通や国道の整備によるトラック輸送の普及とともに次第に衰退し、昭和25(1950)年の世木ダム（南丹市日吉町）の建設着工により、京北からの筏流しは途絶えた。その後も嵯峨に近い保津峡からの筏流しは行われたが、昭和33(1958)年頃には次第に姿を消した。



写真2 かつての筏流しの様子
亀岡市文化資料館提供

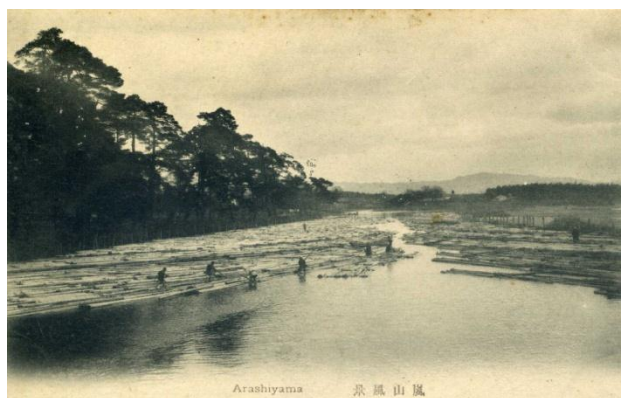


写真3 かつての筏が浮かぶ嵯峨の風景
(亀岡市文化資料館提供)

4. 保津川の筏との出会いから京筏組へ

私が筏流し復活の活動を始めきっかけとなったのは、後述するイベント参加者のほんのひとことであった。平成 19（2007）年 8 月、日吉ダムにおいて「天若湖アートプロジェクト 2007」が行われ、その一環として筏組みの機会を得た。その当時、保津川の漂着ごみに苦慮していた船士仲間とともに後学のためにと参加していた桂川流域ネットワーク主催のイベントである。これは桂川を中心にその流域住民のつながりの再構築を目指すもので、そのつながりのキーワードとして「筏」が採用された。また、単なる筏ではなく、大堰川の歴史と文化を育んできた「ほんまもんの筏」を作ることを主眼とした。元筏士 2 人の指導で、実際に作ってみたが、筏の合理的な造りに驚嘆した。保津峡の厳しい流れを乗り切るために考えられたものであり、先人の創意工夫が如実に感じられた。しかし、河川利用の認可が下りず、筏流しは行われなかった。そこで見学者の一人からこんな声があがった。「浮かべへんかったら、筏とちゃう。」と。私は、この言葉に筏流しへの興味をかきたてられたといっても過言ではない。筏を組んだだけでは、筏について何もわかっていないことに等しい。この伝統的な筏に新たな命を吹き込めないと考えた。伝統的な「ほんまもん」（＝本物）の筏でなければ、大堰川の歴史と文化は語れず、またその上に新たなものは構築できない。地域独自の伝統的な「ほんまもん」の上に新しい「ほんまもん」を作り上げていく方法を模索した。

その当時、私は、亀岡市の NPO プロジェクト保津川に所属し、保津川的环境美化活動に参加していた。この環境美化活動は、世界的な観光地であり、生物多様性をもつ保津川が、単なる流域のごみを垂れ流す排水路と化している現状を改善する目的で始められた。私たちは、この環境美化の活動に新たな理由づけが必要と考えた。地域住民に多大なる恩恵を授けてきた保津川、さらにその筏の歴史と文化を再評価、再提示することで、その現状へのさらなる関心を引き寄せないかと考えた。

私たちの呼びかけにより、環境の観点からだけではつながり得なかった諸団体とのつながりが生まれた。平成 20（2008）年、保津川流域の行政と民間諸団体が集まり、「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」（以下、筏協議会）が発足し、元筏士への聞き取り調査や筏流しイベントが行われるようになった。翌年には、他地域からの参画を得ながら、さらなる発展を目指し、「京筏組」となった。現在は、環境・歴史・文化の観点だけではなく、林業をはじめとする地域産業の発展、新たな観光資源の発掘という観点からも保津川とその筏文化の情報と活動を国内外に発信している。

5. 保津川の前筏士たち

平成 20（2008）年 5 月より、亀岡市保津町在住の前筏士、上田潔氏と酒井昭男氏に筏組み・筏流しの技術について聞き取り調査をしてきた。元筏士はこの地域では 2 人だけとなった。

上田氏は大正 9（1920）年 4 月 29 日、亀岡市保津町生まれ。昭和 23（1948）年頃筏士となる。酒井氏は昭和 2（1927）年 5 月 3 日、亀岡市保津町生まれ。16 歳より祖父の勧めもあり筏士となる。

2 人とも昭和 32（1957）年～昭和 33（1958）年頃



写真 4 保津川の前筏士（京筏組提供）

まで、保津峡から筏を流していた。

ここで当時の筏士の一日を紹介する。朝 7 時半頃、山陰本線の亀岡駅を汽車で出発、保津峡駅で下車し、保津川の現場へと向かう。主に筏士は 4～5 名を一組とし、木馬⁵や牛車で川辺に運ばれた木材を川に落とす者、木材を太さや長さによって並べ替える者、1 連ずつ筏に組む者、組まれた連を 1 枚の筏につなげる者、とそれぞれ役割分担がなされていた。平均 12～13 連をつないで 1 枚の筏とした。筏を組み終わるのは、14 時頃で、それから筏で嵯峨へ向かうのである。上田氏はこの時「やれやれ」という気持ちになった。それだけ急斜面、急流での筏組は危険な重労働であった。嵯峨まで下ると、筏は筏仲仕⁶に引き渡し、筏士は嵯峨駅へと帰途に向った。

当時の筏流しは、主に農閑期の冬期、保津峡と呼ばれる峡谷内の足場の悪い中で行う寒さと危険を伴う過酷な仕事であった。酒井氏が言う。「あんなもん（筏の仕事）、ひとのする仕事とちゃう」と。

6. 保津川の筏とは

ここでは、保津の元筏士より聞き取った昭和初期の保津川筏を紹介する。

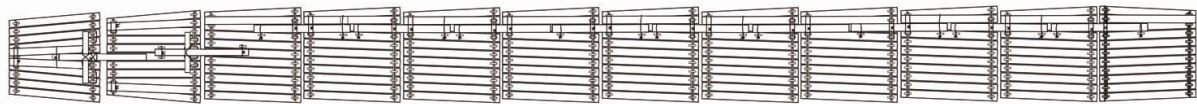


図 3 筏全体図（簡略版：左が先頭）筆者作成

6.1 筏の概要

保津峡を下る筏のサイズは、木材の種類や川の状況（川の増減水、川幅の状況）によって、多少変化させていたようであるが、幅は 1 間 2 尺（約 2.4m）、長さは 30 間（約 54.5m）とされていた。筏全体は「枚」「条」などと呼ばれ、1 枚の筏は 12～13 の「連」で構成されている（図 3）。1 連のサイズは長さ約 4m を基本とするが、幅は各連によって変化した。幅約 2.4m は、1 枚の筏の 9 連目辺りの連の幅を意味し、先頭の連の幅は約 1.8m で、9 連目まで段々と広めていき、それから最後尾の連まで狭めていく。つまり、舟形になるように組まれていたようだ。そして、長い木材は筏の後部の連で組まれた。これは、なるべく筏の前部から中央部までは、ある程度曲がることを必要としたためである。

筏を組む時に使う部材は木材、コウガイ⁷、藤蔓⁸、そしてカン⁹である。ここでは、便宜上、11 本の木材を使って筏組みの解説をする。

⁵ 「きんま」と呼ぶ。木材を運ぶそりみたいなもの。

⁶ 「いかだなかし」と呼ぶ。筏を解体し、嵯峨の貯木場へ運ぶ人。

⁷ 主に檜の木。太さは親指よりやや太め、長さ約一尋半（2.7m）に伐採する。

⁸ 太さは中指ほど。長さ約一尋半に伐採する。

⁹ 「ヒル」とも呼ばれる。約 23cm の鉄の棒の先を尖らせ、U 字型に曲げた金具。カスガイ的なもの。

6.2 連を組む

筏の先頭の連は「ハナ」と呼ばれる。まず、川岸から川に向かって、木材を9本縦に並べる。この時、木材の細い方を先頭側（川岸側）、太い方を後部側（川側）にするように並べる。なるべく先頭部が狭く、後部が広い扇型の筏にするためである。木材の端は川岸に載せる。ある程度木材を川に浮かべるのは、重い木材を扱う場合、その浮力を利用することで扱いやすくなるからである。ハナの前頭側にコウガイを木材に対して横に這わし、コウガイを挟むように、カン



写真 5 連を組む 京筏組提供

ンをコウガイに対し垂直に木材へ打ち込む。カンとコウガイの間の隙間に藤蔓を筏の内側から通し、ねじりながらカンの頭頂部を挟み込むように折り返す。反対側も同じようにする。折り返した藤蔓を抑え、藤蔓とコウガイを挟むように、カンをそれらに対し垂直に木材へ打ち込んでいく。ここであまり打ち込んではいけない。木材をばらす時にカンが抜きになる恐れがある。ある程度、カン、藤蔓、コウガイ、木材に隙間がある方がよい。なぜならば、隙間（あそび）がないと、急流の揺れに対応できず、藤蔓、コウガイが折れる恐れがあるためである。しかし、ある程度打ちこまないとカンが外れる恐れもある。この度合いは長年の経験で培われるものである。

先頭側ができるとそこに2本の木材を差し込む工程が入る。9本の木材の中心と両隣の木材の間に、1本ずつ木材を挟み込んでいく。先頭側には差し込まず、後部側に差し込む。先頭側は木材9本分の幅、後部は11本分の幅となり筏は扇型となる。この筏の幅を調整する木材を「ハバギ」という。これを川に一旦浮かべ、回して、後部側を川岸に載せる。11本分の木材を先に示したように組んでいく。これでハナの筏がほぼ完成である。

次に、2連目「ワキ」の筏を組んでいく。先頭部分は先に示したように組む。その後「ハナ」と違うところは、2本の木材を差し込む位置である。両端の木材の内側に1本ずつ木材を挟み込んでいくのである。そして後部側も前述と同じように組む。これでワキの筏がほぼ完成する。

3連目「ソウ」を組んでいく。またここでも挟み込む木材の位置が違ってくる。木材を10本並べて、先頭を組み、残りの1本を先頭側に向かって右側、端より1本内側に差し込み、組んでいく。これで、ソウがほぼ完成する。3連目以降の連は3連目と同様に組んでいく。ただし筏全体の最後部＝「猿尾（さるお）」は反対向きとなる。猿尾だけ反対向きになるのは、前述したように筏全体を舟形のように、なるべく流線型にして、水の抵抗を緩和させるためであったそうだ。

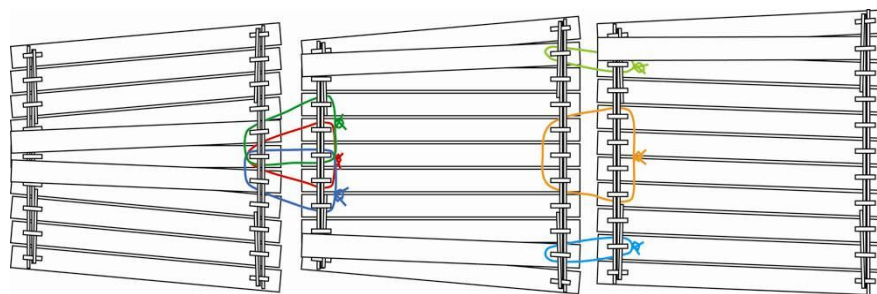


図 4 連の基本的なつなぎ方 筆者作成

6.3 連をつなぐ

ハナとワキをつなぐ場合は連の中心部のみをつなぎ合わせる（図 4）。これは、ハナに筏の「ネジキ」（＝舵の役目）が取り付けられるためである（ネジキについては後述する）。ハナの後部の真ん中のカンを中心に 3 本の藤蔓でつなぐ。藤蔓はコウガイと木材の間の隙間を通す。1 本目（赤線）は、ハナ後部の中心のカンとワキ前部中心部のカン 3 本分を囲むように結ぶ。2 本目（青線）は、ハナ中心部のカンと左側のカンとワキ前部の中心のカンと左 2 本分を囲むように結ぶ。3 本目（緑線）は、ハナ中心部のカンと右側のカンとワキ全部の中心のカンと右 2 本分を囲むように結ぶ。この 3 本の藤蔓はきつく結んではならない、ある程度ゆるみがある方が、筏が上下左右に動いて都合がいいのである（図 7）。次はワキとソウを 3 本の藤蔓でつないでいく（図 4）。1 本目（橙線）は、ワキ後部の中心部のカン 3 本分とソウ前部の中心部の 4 本分を囲むように結ぶ。2 本目（水色線）は、左端から 2 本目のカン同士で結んで、3 本目（黄緑線）は、右端から 2 本目のカン同士で結ぶ。ハナ・ワキとワキ・ソウの結び方の違いは、ハナ・ワキはある程度筏が左右に動くように（筏の首の役目をする）、ワキ・ソウはあまり筏が左右に動かないようにするためである。3 連目以降はワキ・ソウのつなぎ方と同様につないでいく。

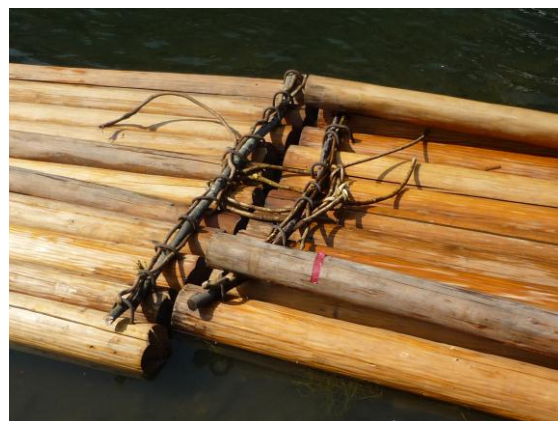


写真 6 連をつなぐ 京筏組提供

6.4 舵（＝ネジキ）を取り付ける

舵は筏で一番重要な箇所、しっかりとりつけないと筏がスムーズに流れない。舵は「ネジキ（カジボウ）」と言って、ハナとワキに取り付けられ、筏士はそれぞれワキとソウに乗って舵を操る。

まず先頭のネジキを取り付ける。これは一番矢とも呼ばれ、舵の中で一番重要な箇所である。筏の中央部に挟み込んだ 2 本の木材の前部を持ちあげ、隙間にネジキの土台となる細めの木を挟み込む。持ち上げた木材の間にネジキを差し込む。少し細めの木材があればいいだろう。3 本の木材の交わったところを藤蔓でくくる。藤蔓でネジキの上を通し、藤蔓の両側を両側の材木を下から巻くように上に持ってきて、3 本の木材をくくる。そして、挟み込んだ土台を抜き、浮いている 2 本の材木を抑え込み、筏とくくる。すると先程 3 本の木材をくくった藤蔓が締め、3 本の木材がある程度固定される。土台をネジキとハナの後部の間に挟み込み、ネジキと土台と筏とを一緒にくりつける。この場合、一旦、ネジキを左に振りくり、次に右に振りくり。そうすることで藤蔓がしまり、しっかり固定されるからである。ここをしっかりと固定しておかないとネジキがゆるみ、うまく筏を操れない。ネジキの高さは中腰で舵を操るため腰よりも低めとする。

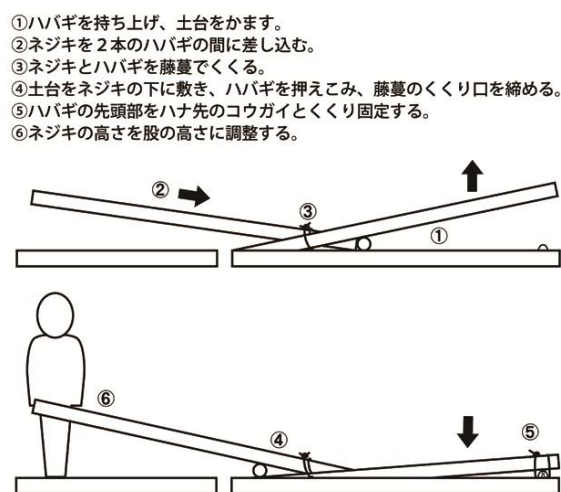


図 5 ネジキの取り付け方 筆者作成

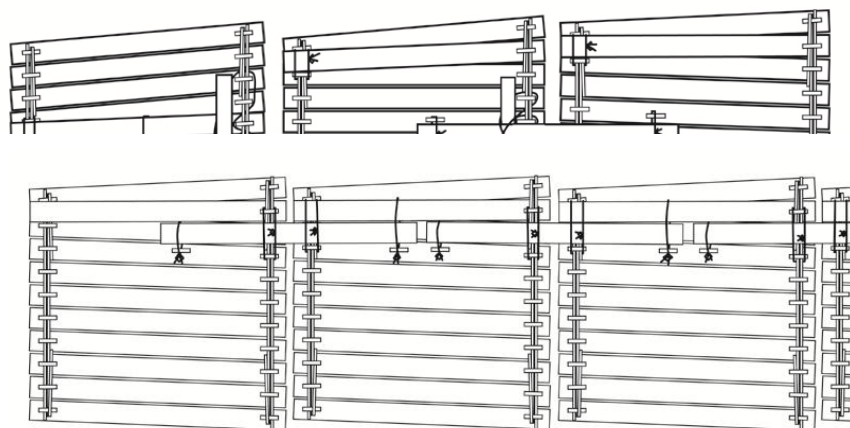


図 9 カセギの取り付け方 筆者作成

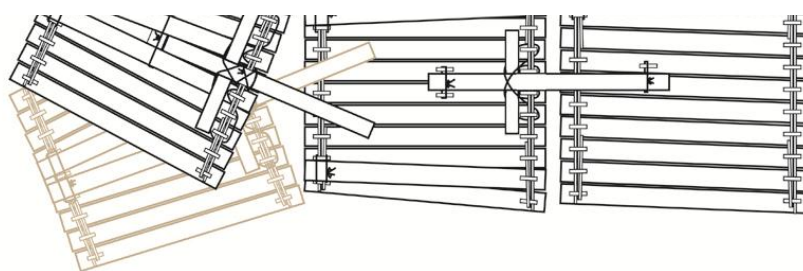


図 7 一番矢の動かし方 筆者作成

次に 2 番目のネジキ、二番矢を取り付ける。これはワキからソウにかけて取り付けられる。一番矢の補助的な役目を担い、一番矢より低く、膝より低く設定する。ワキの筏の右から 4 本目辺り（筏の中央よりやや右側）にネジキを取り付けるため、ネジキを基準に左右のワキの木材にカンを縦に打ち込み、藤蔓で固定する。ネジキとワキの後部の間に土台となる細めの木を挟み込み、1 番矢と同じ方法で固定する。ソウにはネジキの右側にカンを 1 本打ちこみ縛る。2 番矢は手で操るのではなく、棹を筏の木材の間を支店にネジキにあてがって、艇子の原理で左右に動かすことで舵をとる。

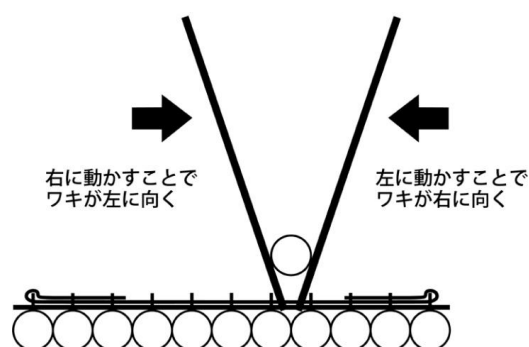


図 8 二番矢の動かし方 筆者作成

一番矢を動かすことでハナ全体が、二番矢を動かすことでワキ全体が連動して動き、左右上下に動かすことで筏の動きを制御する。筏の操舵は、川の流れを判断することもさることながら、常に筏全体の動きを判断しながら、操舵しなければならない。

6.5 カセギを取り付ける

カセギとは、筏の右側に各連をまたがって取り付けられる、筏の背骨的役割を担うものである。このカセギを取り付けないと筏が曲がりすぎて連と連の間で折れてしまう恐れがある。元筏士から聞いた話では、負荷がかかりすぎて途中でカセギが折れることもあったそうだ。

カセギはソウから猿尾まで取り付けられる。ソウから 4 連目に木材をハバギの左側に這わせ、ハバ

ギとともにくくる。4、5連目に上記と同様にくくり、これを猿尾まで繰り返す。

7. 京北の筏師

平成 22 (2010) 年から、京都市京北町在住の元筏師・栗山季夫氏の聞き取りを行っている。栗山氏は、京都市京北町魚ヶ淵在住、大正 14 (1925) 年生まれ。16～19 歳までの二冬、筏流しに従事し、京北・上桂川（大堰川）の筏流しを知る最後の筏師である。15 歳の時、実の姉の嫁ぎ先であった栗山数之介氏の養子となった。義父が筏師であったため筏師となった。当時は 15、16 歳で筏師になることはなかったが、戦争の影響で筏流しを担うのは、老人か少年しかなく、16 歳で筏師になれた。材木屋と筏師の連絡役を担当しながら筏流しに精を出した。二冬しか筏師を経験していないためか、筏師と呼ばれることに違和感があるそうだ。また夏期は鮎釣りで生計を立てていた。新米の筏師の頃は、漁労で得た収入の方が多かったという。戦後、40 歳代まで山仕事をする杣（そうま）の仕事をし、滋賀県・朽木で年 3 ヶ月計 4 回ほど杣の仕事に従事したこともある。

京北の筏は、保津の筏とは大きな違いがある。それは、筏組みの方法である。保津の筏が、カン・藤蔓・樫で組まれるが、京北の筏は、木材の両端に穴をあけ、ネソ¹⁰で木材同士をくくりながら組まれる。保津の筏は、保津の元筏士によれば「カン筏」と呼ばれるのに対し、京北の筏は、学術的には「メガチ筏」と呼ばれる部類に入る。ネソは自らが作るのではなく、親方がネソ屋から仕入れていた。ネソ作りは雪が多いこの地域の冬場の内職であった。ネソ屋という商いが成立するくらい、筏組みには大量にネソが必要であった。栗山氏の話では、1 枚（乗）の筏を組むのに約 300～400 本のネソが必要であったという。平成 6 (1994) 年、平安建都 1200 年を記念して、栗山氏を中心に筏流しが再現された時、ネソ探しに苦慮したといわれる。

筏流しが全盛期のころは、人々が山を管理し、マンサクの木を定期的に伐採したため、ひこばえ（萌芽更新）した手頃のマンサクが多くあった。しかし、山の手入れがされず、マンサクを必要としない現在では、大きくなったマンサクはあっても、手頃なマンサクがないという。山の営みと川の営みが互いに支えあって、筏流しが成り立っていたのである。筏流しの復活と言っても、単に筏組みと筏流しの技術を継承するだけでは成り立たない。筏文化、さらには川文化を支えてきた山文化の再考なくしては、筏文化を再考することもで

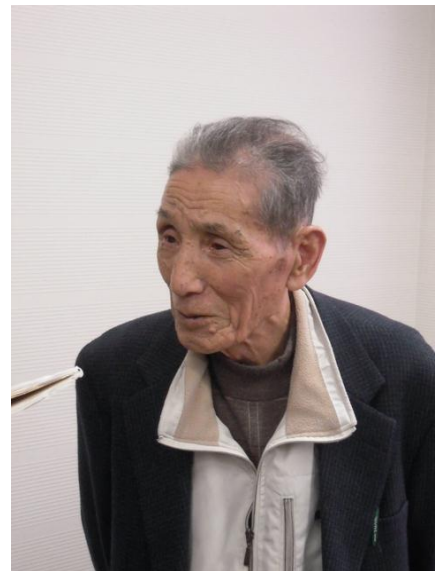


写真 7 栗山季夫氏 筆者撮影



写真 8 ネソ 筆者撮影

¹⁰ 一尋の長さのマンサクの木（指の太さくらい）を火であぶって捻ったもの。1 束 20 本で計算されていた。水に強く、腐りにくく、2～3 年は保管できた。水で戻して柔らかくして使用する。

きないのである。

京北の筏流しも、保津と同じく、9月15日から翌年5月15日までである。9月15日から元旦までは、筏の航路確保のため、川の工事をしていた。これを川作（かわさく）という。山国・下村、魚ヶ渚、下宇津各村の筏師約10名ずつ、計約30名が作業にあたった。自分たちが受け持つ筏流しの区間は、自ら航路整備をしていた。極寒の川の中、足袋と草鞋だけの作業、想像を絶するものであったという。私の所属する保津川下りでもそうであるが、自然の川では舟や筏は流れない。川作りの知恵は、川を熟知し、筏を熟知してこそ成り立つものである。自然とのたゆまぬ対話の中で、培われた人々の知恵は早晩では構築できない。

ここで栗山氏の筏仕事の一日を紹介する。筏流しは主に京北町・上黒田の灰屋口から日吉町上世木（今は日吉ダムの完成により現存しない）までの約36kmの区間である。自分の住む魚ヶ渚を起点に灰屋口から魚ヶ渚を「オクユキ」、魚ヶ渚から上世木までを「シモユキ」と呼んでいた。

1日目は、灰屋口から魚ヶ渚まで。昭和18（1943）年に周山駅から下黒田までバスが運行するまでは、朝3時に起きて、魚ヶ渚から徒歩で3時間かけて灰屋口（上桂川と灰屋川の合流点付近）まで向かった。灰屋口に係留されている筏を点検し、魚ヶ渚まで下す。片波川と上桂川の合流地点と灰屋口の間あたりにトメ（堰）があり、堰を切る専門の「トメヌキさん」が堰を切って筏流しが始まる。オクユキの行程の前半部は流れが速く、川幅が狭い。後半部になると川幅も広くなり、流れも緩やかとなる。一日仕事のため、昼食は、この後半部で筏の上で、握り飯や納豆餅を食べていた。2日目は、魚ヶ渚から上世木まで。魚ヶ渚の上流、山国の下村に堰があり、当番の筏師（輪番制）が堰を切って鉄砲水を流し、下の魚ヶ渚の筏師に堰を切ったことを徒歩で連絡する。知らせを聞いた筏師は筏を下す準備をし、堰の鉄砲水を待って上世木まで筏を下す。上世木には昼ごろには着いて河原で昼食をとり、徒歩で魚ヶ渚まで帰った。

筏流しの服装は、筏流しの季節が秋から春にかけてと言っても、決して厚着せず、常にシャツに半纏であった。なぜならば、厚着は溺死する危険性が高まるためであった。栗山氏は、それでもあまり寒さは感じなかったという。それが当時は当たり前のことだったからであろう。

栗山氏は、筏の仕事は「まともな人間のする仕事とちゃう」という。しかし、極寒の冬、川作をし、筏を下してきたかつての筏師たちの暮らしが、京都・大坂の発展を支えてきたのも事実である。その記憶は、残された私たちの「宝」であると思う。今後も、栗山氏を通して、その記憶を掘り起こしていきたい。



写真 9 片井操氏 筆者撮影

8. 大堰川（保津川）の筏を支えた人たち

8.1 鍛冶・片井操氏

保津川の筏組みには、木材、藤蔓、コウガイ、カンといった資材が必要なことは、前述したが、さ

て「カン」はどこから入手したのであろうか。

平成 20（2008）年の保津川筏復活プロジェクトの筏イベントでは、元筏士が 60 年前から所有するカンを使って 6 連の筏組みを行った。しかし、これらは貴重なものであり、また、筏 6 連分を組むには足るが、12 連を組むには数が少なかった。将来的に保津川に 12 連の筏を流すには新たなカンを手しなくてはならない。入手先を探さなければならなかった。

前述の NPO の法人会員である地元建設会社の会長の祖父が、かつて保津で林業関連の親方をしており、その下で元筏士の上田氏と酒井氏は働いていた。その会長から亀岡市京町にある片井鉄工所を紹介された。片井鉄工所は以前、上記親方にカンを納めていた鍛冶屋であり、元筏士の所有するカンはここで作られていたものであった。平成 21（2009）年の筏イベントを見据えて、カンの調査のため片井鉄工所を訪ねてみた。鉄工所であり、昔は鍛冶職人であった人であるので、どれほど頑固な人であろうかと思いきや、気さくで、話好きの人であった。この人が片井操氏である。

片井操氏（以下、操氏）は昭和 5（1930）年生まれである。先代の片井嘉助氏（以下、嘉助氏）の頃から亀岡で鍛冶を営んでいる。元々片井家は和歌山県日高郡南部町（現在のみなべ町）の出身で、嘉助氏の先代より「上下鍛冶」を営んでいた。上下鍛冶とは、地元に住みながら、他地域に出て鍛冶屋を営むことである。嘉助氏は三人兄弟の二男で、兄弟とともに、3～5 月の稲作前と 8～10 月の麦作前に南丹市日吉町に鍛冶小屋を建て鍛冶屋を営み、それ以外は地元で畑作や漁労をして生計を立てていた。結婚を機にそれぞれ独立し、長男は南部、嘉助氏は亀岡、三男は兵庫県の篠山で鍛冶屋を営むこととなった。

操氏は、15 歳から嘉助氏の下で鍛冶となる。片井家は、野鍛冶といって農林業の道具を製作・修理する鍛冶であった。終戦後、京都府亀岡野鍛冶組合が組織され、約 17 軒の野鍛冶が所属した。各村には必ず 1 軒は鍛冶屋があり、かつての文部省唱歌の童謡「村の鍛冶屋」さながらであった。村の鍛冶屋は、地域の産業を支えていたのである。

操氏の話によると、最盛期で約 500 軒の農家と取引し、年間約 300 丁の道具を製作・修理していた。主に麦の栽培の始まるお盆過ぎから収穫の 11 月初め頃までが仕事のピークであった。当時の鍛冶の一日を見てみると、操氏が 5 時から 12 時まで鍛冶や配達、嘉助氏が 8 時から鍛冶に加わり、昼から 18 時まで二人で鍛冶をして、嘉助氏が 21 時まで残業するというスケジュールであった。仕事の合間に操氏が自転車で農具等を回収・配達、集金をしていた。隆盛を極めた鍛冶も昭和 35（1960）年頃から農具の機械化が始まり、仕事量が減少してきた。時を同じくして、木造住宅が鉄骨住宅へと移行しつつあり、鉄骨を扱う鉄工所を営むようになった。昭和 45（1970）年頃に亀岡市別院に工場を移し、京町の火造り場はあまり使われなくなった。しかし、操氏は、父嘉助と亡き妻との思い出の詰まった火造り場を解体する気にはなれず、現在でも約 10 軒の農具の修理を請け負っている。京都府では福知山市とここ亀岡市に 2 軒のみの昔ながらの火造り場となった。

農具等と同じように筏のカンも鍛冶屋で作られていた。前述したようにカンを渡邊家に配達したのは操氏であったが、筏流し自体を山陰本線の列車での京都への途上でしか見たことがなく、カンがどのように使われているか知らなかった。鍛冶修行には約 10 年かかるともいわれる中、父・嘉助氏の仕事を盗みながら必死に覚えていった。「人の仕事を見る暇があるんやったら、自分の仕事をせえ」という時代であった。

元筏士の話によると、一回の筏流しに使うカンの数は 250～300 個、筏組みや貯木場での解体時での紛失や使いこんで不良となるカンがその約 5～10%であった。このため、定期的に補充が必要であ

った。片井家では、カン作りに年間約 15 日を費やしたという。

初めて操氏と会った日が思い浮かぶ。アポイントもせず訪れた私を待っていたかのようにであった。平成 20（2008）年の筏流しのイベントが京都新聞に掲載されていたが、操氏はその記事を切り抜き大事に保管していた。筏という言葉には、思い出が詰まっていて、私たちの活動に興味を持ち、いつ来るかと待っていたという。

平成 21（2009）年の筏流しに必要とするカンの数は筏 6 連分約 150 個であるが、将来を見据えて 12 連分 300 個のカン製作を依頼した。「文化的にお役に立つのであれば」と快諾された。今では必要とされなくなった鍛冶技術が現在に活かされることを喜びとし、またその技術がどういう形で後世に伝わることを欲していたのである。

ここで簡単にカン作りについて解説してみる。まず 3 分の鉄筋（φ9.525mm）を長さ約 23cm に切り分けておく。火床に松の割木と松炭をくべて火をおこす。昔は松炭だけであったが、さらにコークスを足して火力を上げていく。前記の鉄筋の片方の端を火床に差し入れ、ふいご（送風機）で火力を上げていく。ふいごの微調整で火力を加減し、熱せられた鉄から飛び散る火の粉を見て、鉄の温度と鉄の溶け具合を判断する。特に鋼と鉄を打つ刃物類は 1、2 秒の遅速が刃物の良し悪しに響くという。頃合いを見計らって、鍛冶屋箸で鉄筋をはさみ、鉄槌で鉄筋の先をとがらせる。さらに反対の端も同じような工程で先をとがらせる。次に曲げの作業に入る。鉄筋の真ん中あたりを火床に差し入れ熱する。鉄筋の真ん中をはさみ、端を金床にあて、反対の端をたたきながら、鉄筋を曲げていく。また、金床の様々な部分を利用して U 字型に成形していく。形が整うと一気に水に入れて焼きを入れる。焼きを入れることで鋼の硬度を上げるのだが、刃物の場合は油につけて焼きをいれる。一気に冷却すると刃が割れる恐れがあるからだ。焼き入れ後冷却しカンの完成となる。



写真 10 新しいカンと 60 年前のカン
（筆者撮影）

延約 10 日間でカンが仕上がる予定であったが、ここで面白いことがおこった。筏協議会のメンバーで約 60 年ぶりのカン作りの見学会を催したが、これが期待以上に好評であった。メンバーである京都学園大学歴史民俗学専攻の先生が是非学生に見せてあげたいと学生対象のカン作りの見学会や体験会が行われた。その後も地元の人やマスコミ関係者などが訪れることとなった。今までひと気のなかった火造り場に、火が入り、人のつながりが生まれ、人が集う場所となった。「多くの方々にこの催しを見てもらいたい」とカンが完成したのは注文してから約 3 ヶ月後であった。この 3 ヶ月、片井家の火造り場はまるで地域のサロンのようであった。

60 年ぶりにカンを作る中で、操氏にこんな思いが募ってきた。「わたしが作ったカンを使っていた元筏士さんに一目お会いしたい」と。60 年前には決して会うことはなかった筏士と鍛冶。カンを通じてつながっていた人々を 60 年ぶりにつなげてみたいと思った。私が橋渡しとなり 60 年目の初対面が火造り場で実現した。思い出話で盛り上がる中、筏士の前で鍛冶がカンを打った。操氏のカンを打つ槌さばきに関心するかと思いきや、元筏士は火を自在に操り、鉄の温度を瞬時に読み取る様に感心していた。「私らは水（川の流れ）加減はようわかるが、火の加減はわかりません」（上田氏談）。職種は違うが、職人は職人のことがよくわかるのである。確かな技術の前には、必ず確かな知識と経験の

積み重ねが必要なのである。そして私の目の前に見えているものは、技術の一片にも満たないということに改めて思い知らされた。農具と筏といった物理的なもの扱う技術を養う前に、火と水という自然を瞬時に見極める目を、瞬時に対処する理（ことわり）を養うことの方が肝要なのである。だからこそ、昔の職人は、先輩の仕事を目で盗んだのである。目で盗むこと、それはものの本質を見抜き眼力を養うことにつながるのであろう。

平成 21（2009）年 9 月、保津峡からの筏流しイベントに操氏を招待した。60 年ぶりに作られたカンを使つての初めての筏組みを実際に見てもらった。組みあがった筏の連に乗り、ジッと自分のカンを見ながら佇む操氏の姿が今でも目に焼き付いている。どのような思いで筏を見つめていたのであろうか。60 年の時を経て、鍛冶の記憶の中に眠っていたカンそして筏流しを再現できた瞬間であった。そして、平成 22（2010）年 10 月には、実際に操氏に筏に乗ってもらい、保津川を下ったのである。途中、筏が操舵不能となった場面では、「みなさんを信じていましたから」と動揺することもなかった。緩流を流れる筏の上でいつもは饒舌な方が、静かに筏に身をまかせていた。そして「私だけがこんなに幸せもうて、もったいないことです。この幸せをみなさんにも分けてあげたいわ」と感激されていた。

60 年ぶりの筏復活。言葉で言うのは簡単であるが、さまざまな要素が絡み合って実現してきた。元筏士、鍛冶の年齢を考えるとある意味、奇跡的といえるであろう。ほんまもんの筏士から筏流しを習い、ほんまもんの鍛冶からカンを頂く。何一つ欠落しても「ほんまもん」は生まれ得ない。操氏の存在自体がありがたいことである。私たちなりのわずかな恩返しのできたのではないだろうか。

前述した京都学園大学の鍛冶体験会であるが、今では、歴史民俗学専攻の新入生のスクーリングに取り入れられ、学生有志による鍛冶屋倶楽部が結成されるなど、活発な動きになりつつある。その中で、平成 22（2010）年、京都学園大学大学院人間文化研究科修士課程 2 回生（当時）で、鍛冶屋倶楽部の代表を務めた西村明弘氏の映像作品「感謝一筋～片井さんの鍛冶屋“鉄”学」が、ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》2010 の第 6 回ヒューマンドキュメンタリーコンテストで最優秀賞を受賞した。この作品は、どんな苦難にも「感謝一筋」の気持ちで乗り切ってきた操氏の人柄と仕事を追ったドキュメンタリーである。

今でも私は 2 ヶ月に一度は、操氏とのおしゃべりを楽しんでいる。時には二人で、時には学生や地域の人々とともに。操氏は、どのような時でも「みんなに笑ろうてほしいんですわ」と言い、どのような人でも分け隔てなく、感謝の気持ちを持って、笑顔で接している姿に頭が下がる。操氏には、難しくも簡単な人と接する術があふれている。

筏の技術を継承するように、鍛冶の技術を継承することは、前述するように簡単なことではない。しかし、技術の継承が不可能であったとしても、これまで培われた人々のつながりはこれからも継承されていくであろう。そして、操氏の職人としての知恵と人間としての知恵が、西村氏の言う操氏の「鉄」学という形で、京都学園大学の学生を中心に、今後も広まることを期待したい。「感謝一筋」という言葉とともに。

8.2 元杣人¹¹・田中利一氏

¹¹ 杣とは木材の茂る山のことであり、そこから転じて林業従事者を杣や杣人と呼ぶ。保津の元筏士らは、林業従事者を杣が訛った「ソーマ」と呼んでいる。

平成 22 (2010) 年から、京都市右京区京北町の田中利一氏より、昭和 20~40 (1945~1965) 年代の伐採から搬出までの山仕事について聞き取りを行っている。京北町に係累も地理感もない私にとって京北町の方と知り合いとなる機会は少ない。平成 20 (2008) 年から保津川で筏流しのイベントを行う際、亀岡市の有限会社南丹運送に木材運搬を依頼し、社長の富士原氏と懇意にさせていただいている。筏流しの研究を行う中で、木材伐採・搬出等の山仕事に興味を持ち始めた私は、富士原氏に昭和 20~40 年代の林業従事者について相談した。紹介されたのが、平成 20 (2008) 年の筏イベントで木材を運搬した運転手であった。彼自身は木馬曳きの経験はないが、兄の田中利一氏が京北町で木馬曳きをしていたのである。京北町の役場に行けば、田中利一氏を紹介されたかもしれない。しかし、かつて京北から亀岡まで筏が流れ、人のつながりがあったがごとく、今、筏イベントをとおして、人のつながりが亀岡から京北へとつながっていくことがうれしかった。また、係累を通じての紹介であったからか、田中利一氏も初めからあまり不信感もなく私と接してくれたことが有難かった。

田中利一氏 (以下、田中氏) は、大正 12 (1923) 年、京都府北桑田郡山国村字大野 (現在の京都市右京区京北大野町) 生まれ。当時この地域では、子供たちの進路は決まっており、長男は家業を継ぎ、その他は京都等に丁稚奉公に出た。彼も高等小学校卒業後、京都・西大路三条にある材木屋に丁稚奉公に出た。昭和 16 (1941) 年に海軍に志願し、同年の真珠湾攻撃に従軍、各地を転戦し、主に機関兵として活躍し、舞鶴で軍需部の保安隊長として終戦を迎える。戦後、京北町に帰り本格的に林業従事者となる。

農繁期を除いては、春は植林、雪起こし、杉つり、夏は杉やヒノキの伐採、下刈、秋は木馬曳き (木材搬出)、冬は、松伐り、雪出し (松出し)、柴・割木作りとほぼ一年中林業に従事していた。昭和 50 年代 (1975~1984 年) までは林業も盛況であったという。

ここで、田中氏の山仕事の一年の暦を簡単に紹介する。雪深い京北町では冬季 1 月から 3 月は、主にわらじを編み、柴や割木などの燃料を拾えるなど一年間の営みに備えた。また、在所の近くの山の松を伐り出す作業もあった。重い松を出すのは冬が最適であった。雪が残る午前中、雪出しといって雪の上を滑らせてマンリキ¹²や木馬で搬出するの



写真 11 木馬を担ぎ木馬道を登る
田中利一氏提供



写真 11 田中利一氏 (筆者撮影)



写真 12 若かりし頃の田中利一氏
田中利一氏提供

¹² くさびと環が一体となった金具。マンリキを松の木口に打ち込み、ロープを環にくくり、たすき掛けして松の木を

である。

3～4 月にかけて春のヒノキの伐採がある。よく伐採時期は夏の土用からと言われるが、ヒノキは皮を剥かないため、早めに伐採しても干割れしにくく、早期乾燥・早期出荷を促すため春に伐採することもあった。4 月は植林の時期でもある。1 町（100 アール）辺り約 3000 本植える。4 月から農作業も忙しくなってくるが、田中氏は、牛で田拵えをするくらいで、田植えや稲刈りは奥さんの仕事であった。

5～6 月にかけては、雪起こしや杉つりで、植林した苗木のメンテナンスである。雪溶けを待って、雪で倒れた苗木を起こす。この作業を約 10 年生まで続ける。5、6 年生までは、わら縄で引っ張って起こす。わら縄だと雪が降るころになると朽ちて切れて、弱い苗木は倒れる。朽ちて切れることが肝要で、切れないと積もった雪の重みで木の先が曲がってしまう。杉つりは、春から秋にかけての成長期間の育成促進と風雨による倒木を予防するためのものである。7 年生以降は、丈夫な縄で起こす。

7～10 月までが本格的な杉とヒノキの伐採の時期である。特に杉は、夏の土用から秋の彼岸までが伐採に適した時期である。ソウマエ（杣前？）といって土用前に伐採することもあった。これは皮が剥きやすく、早期出荷を図るものであるが、木材の品質低下につながる恐れもあり、あまり行なわれなかった。

杉山の伐採の場合、まず業者（又は山主）とともに受け持つ山を見分し、束の値段と別途付加金を決める。2 尺 1 寸 5 分の幅で剥いた木皮（杉皮）を 10 間（1 間＝1.8182m）並べたものを 1 束とし、束いくらで計算する。別途、山全体でいくらといった付加金がついた。その後、請け負った班（4～5 人）で山割りをして作業する場所を話し合いで決め、付加金を配分する。田中氏の話では、班の人数が 5 人の場合、山を 5 つに山割りする。5 つの現場は難易度が異なるため、難易度によって別途の付加金を配分して、作業難易度と賃金を平らにし、平均をとるのが理想であるが、熟練度の低い人は別途付加金を放棄して、難易度の低い場所に行くので、熟練度の高い人ほど付加金を多くもらえた。

山の上の方から伐採を始め、先に倒した木の上に重なるように木を倒していく。これは、木皮を剥きやすくするためである。木皮は商品となる貴重なものであるが、それ以上に自分の賃金計算に使われるものであるから大事に扱われた。倒木の作業を誤ると、杉皮剥きの作業に時間が取られ作業効率が上がらない。一人前の倒木技術を身につけるのに 5、6 年は必要であった。

9 月中旬（秋の彼岸）頃から 12 月末頃まで、杉の伐採時期と入れ替わりに、木馬での搬出作業へと移行する。まず約 1 週間かけて木馬道という搬出する道を作る。約 30kg の木馬を担いで山を登り、約 500～700 才¹³の木材を載せて山を下るのである。行程にもよるが一日 1～2 回往復する。木馬作業も 4～5 人の班単位で作業を行なう。熟練度の低い者ほど先に搬出する。これは途中でトラブルがあった場合、後の人が手助けできるためである。

このように田中氏の一年間を簡単に追ってきた。京北に生きる田中氏にとって林業は生活の糧であり、生きがいでもあった。林業に従事する中で、田畑や約 10 町の山を所有するにいたるなど、林業で生計を立ててきた。だからこそ、今の林業の状況を憂いでいる。持ち山に最後に植林したのが約 30 年前で、出荷適齢期の木材が山に眠っている。出荷したいが、その後の植林まで資金と体力が残らない。持ち山だからこそ「禿山」にはしたくない。京北の街道から山々を見渡すと緑豊かに見えるが、

引っ張る。

¹³ 才・・・材積の単位で、末口 1 寸×長さ約 4m の木材で 1 才である。

※才の計算法 1 寸×1 寸＝1 才。5 寸×5 寸＝25 才。700 才の場合、5 寸の木材だと約 28 本分となる。

谷間や山裏へいくと禿山が多いという。田中氏曰く「山の砂漠化」が進んでいるのであろうか。山仕事を自分の天職であると称し、今ある財産は山からのいただきものと考えている氏にとって、今の状況は見るに忍びない状況であろう。今でも間伐材で薪を作り風呂を焚くなど、山とともに生活を送っている。

保津川の筏流しの実態を研究するなかで、伐採等の山仕事を知ることは必要不可欠な要素である。今後も杣人と呼ばれた林業従事者からの聞き取りを通じて昭和 20～40 年代の彼らの生活、そこにある先人の知恵を探っていききたい。

9. 保津川筏復活プロジェクトの歩み

9.1 保津川筏復活プロジェクト 2008

平成 20（2008）年 9 月、保津川筏復活プロジェクト連絡協議会主催の筏流しのイベントが初めて行なわれた。それまで元筏士より聞き取ってきた筏組みと筏流しの技術の継承とその流域の財産を流域住民に伝えることを主眼とした。亀岡市立保津小学校と京都府立南丹高等学校の生徒を対象に、筏組みの体験教室、試乗会を行い、子供たちの歓喜の声が保津川にこだました。筏を見て、触れて、体感することで保津川の歴史・文化の一端に触れ、保津川の筏さらには保津川自体に対する認識も変わったのではないかと思います。

元筏士の指導の中、保津川下りの船頭衆 11 人で幅約 1.5m・全長約 18m の 6 連の筏を組んだ。保津川の筏は、急流を下るため、荒波にも強い筏を作ることが必要である。筏組みに必要なものは、前述したように木材、カン、コウガイ、藤蔓の 4 要素である。各要素がお互いに調和して初めて強い筏となる。しかし、ここにおける強いという言葉は、一般の意味とは若干異なる。組まれた筏は、隙間があったり、藤蔓は緩かったり一見頼りなく見える。実際、筏に乗ってみても、木材は各々が不規則に動き、その隙間に足が挟まりそうになる。また、連と連をつなぐ藤蔓も緩く、前後の筏が流れごとに離れたり近づいたりする。しかし、これらのことが肝要なのだと元筏士は言う。もし、隙間なくしっかり組みすぎると、荒波に反発するため、筏に負担がかかりすぎ支障が出る。荒波の力をうまく受け流すように「ゆるみ（あそび）」がなければならない。これが強い筏なのである。反面ゆるみすぎてもうまくいかない。この加減は長年の経験知で判断される。「ゆるみ」が「つよさ」を生む。「つよさ」を「つよ



写真 14 保津小学校の筏体験 京筏組提供



写真 15 60 年ぶりの筏の伝承 京筏組提供

さ」で抑え込まない。ここに、先人の自然と接する術を垣間見たように思う。このイベントでは、私を含めた若手船士 6 人で保津川下り乗船場から亀岡市篠町山本まで約 3km の筏流しを行った。これには、川の流れを熟知する現役の船士衆の存在が不可欠であり、川の流れを知らぬ素人では実現不可能である。一瞬の判断で流れを読み、安全な流れへと筏を導かなければならない。400 年培われた我々船士の技術で、1200 年続いた筏士の技術を継承する。今もこの川を生業の糧としている人々の存在は大きい。そして、同じ保津川で生きる者として、保津川の歴史に触れることは重要な意味があった。筏流しの体験は、私たちに、一度途絶えた技術を復活することの困難さ、保津川下りの技術を絶やすことなく継承していくことの重要性、さらにはそれらを担う覚悟や責任を再認識させてくれた。しかし、山本まではまだ穏流部で、そこから始まる保津峡の急流の筏流しは次の年への課題となった。元筏士への調査不足と筏流しの技術の認識不足が課題であったといえた。

9.2 保津川筏復活プロジェクト 2009

平成 21（2009）年は、何度か筏の試作品を作る機会を得ながら、元筏士への筏組み・筏流しの技術の調査を行った。保津川下りの船に乗り、約 16km の行程を映像に撮り、急流毎に筏を流す方向、筏の操舵方法を元筏士より聞き取った。これらの技術は、私自らが保津川下りの船士であるという経験も加味し、理論上はほぼ理解できた。しかし、船と筏とでは、構造がまったく異なる。船の全長は約 11m、筏の全長は約 54.5m。船は一体型であるのに対し、筏は 12 連だと 11 の節をもつまさに蛇のようなもの。先頭部と後部では全く逆の動きをすることもある。また、川の流れは、緩流と急流が繰り返され、それらの兼ね合いも考慮に入れる必要がある。つまり、筏の先頭部が急流に入ると、筏は先へと引っ張られるが、後部はまだ緩流である。そこで連同志の引っ張り合いが起き、筏全体の動きが大きく変化する。流れが速く大きく曲がっているところでは、特にこの筏の動きの変化が顕著になる。操舵を誤ると、筏士言葉で「ネズミとり」といわれるように、筏が折れ曲がって大破してしまう。全長約 54.5m の蛇のような筏を操舵する技術は、一朝一夕では習得できない。

上記の課題を考慮し、平成 21（2009）年 9 月 9 日の筏流しは、急流部でも多少緩やかなコースを選択し、筏の長さは昨年と同じ 6 連、全長は約 24m とした。1 連の長さ約 4m はかつての筏流しの規格とほぼ同じ長さである。

今回は、保津峡内の落合から嵯峨嵐山までの行程である。落合は、川辺に林道が通り、木材の搬入も容易であり、川の流れも緩やかで筏が組みやすい場所である。筏流し前日、地元の材木会社に発注した木材と南丹市八木町筏森山で伐採した木材計 80 本を川辺に搬入した。そこから当日、川に木材を落として筏に組む予定にした。前述した筏士仕事の再現である。しかし、このことが当日ハプニングを生むこととなった。

今回は足場の悪い峡谷ということもあり、高齢の元筏士の指導は依頼しなかった。元筏士からも、自分たちだけで筏を組むことを勧められた。その分、身をもってわかることが多くなるだろうし、自らの知識を知恵へと昇華しなければならない。



写真 16 保津峡を下る筏 京筏組提供

木材を川に落とす作業に船士衆 12 人とボランティアスタッフ約 10 名で取りかかった。約 30 分程度で終える予定であったこの作業が難航を極めた。私たちが木材の扱いに不慣れな上に、木材が思った以上に太くまた十分に乾燥してなく予想以上に重量があったことがさらに作業を困難にした。トラック輸送であれば通用する乾燥状態では、筏流しには不適切であった。また、木材の寸法を末口 15cm、長さ 4m に設定していたが、搬送されたヒノキの間伐材は、太いところで直径約 30cm になることもあった。



写真 17 筏に乗る片井操氏 京筏組提供

重量も長さも千差万別であり、木材を準備するにも、多くの知識と経験が必要であると痛感した。また、それらの木材を筏組する場合、その重量、長さによって、各連に振り分ける作業も大切であった。重量・長さのちぐはぐな連が組まれ、長さの調整が必要な筏や他よりも沈みこむ筏が見られた。

かつては、木材を落とす、木材を選別する、木材を筏に組む作業を各筏士が分担していたが、これらの作業も長年の知識と経験が必要であった。前述したように、元筏士が筏組みを終えると「やれやれ」と感じたことは当然であった。筏を組むことばかりに注目しすぎて、最も重要な木材の仕分け行程の重要性を見落としていた。現在の私たちは、規格の揃った製品ばかりに取り囲まれ、マニュアルに慣らされている。自然の産物といかに向き合い、付き合っていくかという問題には、先人の知恵とさらなる自らの経験が必要である。

また、筏流しにおいても、経験のなさが露呈する場面もあった。筏の後部が岩にあたりながら岩を避けていくこともあった。今回は全長 24m の筏であったので難を逃れたが、かつての筏の長さであれば、どうなっていたであろうか。元筏士の方が「6 連やったら、(船士でも) なんとかなるやろ。12 連はちょっと難しいやろね」と常々言っていたが、その通りであった。かつては筏士になって 1 年以上は舵を持てなかった。1 年以上かかって初めて川の流れ、筏の動きをある程度まで把握できたのである。

このように、今回の筏組みと筏流しは、実に私にいろんな教訓を与えてくれた。聞き取りだけで得た知識は、単なる知識でしかなく、実践して初めて真にその意味が理解できるのである。また、元筏士のなにげない言葉の中に真実が含まれ、その真実は、実践を通してしかわからないものもある。

元筏士の聞き取りにおいて知りえた伝統技術をただ知識としてのみに残すだけではなく、実際に筏を組み下すことで、当時の筏流しの技術の知識を知恵として理解し、地域の歴史的環境へと昇華させることを主眼に置いてきた。しかし、その道のりは遠い。いかにして知識を知恵へ、知恵を歴史的環境へと昇華させていくのか試行錯誤が続く。

9.3 保津川筏復活プロジェクト 2010

平成 22 (2010) 年は、当初 9 月 8 日に昨年同様、京都市右京区の保津峡内の落合から嵯峨嵐山へ

の筏流しを予定していたが、台風の影響により中止を余儀なくされた。当日は、亀岡市文化資料館で、関係者、招待客対象の筏組みのみの講習会を行った。そこで、見学者からは是非筏流しを見たいという声が多く寄せられた。毎年何らかの形で筏流しを保津川で行うことは、地域住民へのアピールを考えると必要である。急遽、計画を練り直し、10月23日、保津川下り乗船場前から山本浜まで筏流しすることとした。

新たな計画を立案する際、まず考えたのが、地域住民を乗せて筏流しを行うことである。これまで、筏流しの地域性、歴史性、連鎖性、真実性を考察することだけとなり、なかなか保津川と地域住民を「実体験」を通じてつなぐことができず、筏イベントは、新たな共通の歴史的環境とはなり得ていなかった。今まで試乗会的なものは行ってきたが、実際、地域住民を募集して、保津川を下ったことはない。保険の関係上、事前に乗員を決めて申請しておかなければならない。そこで、片井操氏に筏に乗ってもらうことを考えたのである。片井氏の年齢を考えると躊躇する面もあったが、前述のように、即答で快く「ありがたいことです」と承諾いただいた。

当日は天候に恵まれ、絶好のイベント日和となった。今回は、平成21(2009)年の教訓を生かし、末口約10cmの木材を主に約60本用意した。日吉町森林組合が伐採した京都府産の間伐材である。私が講師として筏組みを説明しながら、保津川下りの船士衆3人で、約2時間半で6連の筏を組み上げた。ここで一つの問題点が発覚した。筏の幅が思った以上に狭いことである。平成21(2009)年は末口15cmで株元だと30cm以上ある根元付近の木材もあったため、本数を調整して幅約150cmの筏が組めたが、今回は、末口10cmの木材を指定したので、元だと約15cm位になると思い、15cm×9本=135cm以上の

筏の幅を十分に確保できると思っていた。しかし、実際、筏を組んでみると、木材の末と元があまり変わらないため、幅約100cm強の筏となった。末口を細く設定すると、木材の先の方ばかりが選別され、元もあまり変わらない木材になる。これでは、筏の浮力が得られず、操舵も難しくなることが予想された。

筏流しの道中ちょっとしたハプニングがあった。保津小橋という落差のある場所を下る際、舵を担当の船士が舵をうまく操れず、筏が一瞬、操舵不能となった。ここは他の船士が棹で立て直し事なきを得た。先に述べた筏の幅員不足と舵を取る人の経験不足が露呈した結果であったように思う。舵とりはネジキを左右に動かし、舵をとるが、舵場（舵を操る人の乗る場所）の幅員が小さいため、うまく舵が取れなかったようだ。不幸中の幸いか、筏の幅がいに筏の操舵に影響するかがわかった。

平成22(2010)年は、急遽、計画を変更して筏流しを行ったため、地域住民への告知不足が否めず、約50名の見学者となった。自然、特に河川でのイベント計画の難しさを再認識し、高齢者となった元筏士からの操舵技術の継承の困難さもさらに浮き彫りとなった。しかし、保津川に筏を流し続けることは、筏の研究において机上では認識できない問題が浮き彫りとなり、その解決方法を探っていくなかで先人の知恵への理解が深まっていくであろう。また、地域住民が地域の歴史・文化を認識する機会を増やすことが、さらなる保津川の歴史的環境への理解の足がかりとなると期待している。

9.4 保津川筏復活プロジェクト 2011

平成 23 (2011) 年 9 月 10 日に行われた筏イベントは、「いかだにのってみよう！！in 保津川」と題し、約 250 名の親子連れや孫を連れた年配者でにぎわった。今回は保津川下り旧乗船場対岸の河川敷において、地域住民向けの試乗会をおこなった。これまでのイベントは、筏組みや筏流しの調査・研究といった学術的な要素が強く、保津川の筏文化を広く地域住民、特に筏文化を知らない世代に認知させるものではなかった。平成 20 (2008) 年の試乗会的なものであれば、多くの地域住民が筏さらには保津川の歴史と文化を実体験できるのではないかという原点回帰でもあった。従来の筏組みと筏流しの見学といった受動的な要素をなくし、筏に触れて、筏に乗って、保津川に親しむといった能動的な要素を主眼においた。また、従来の広報形態¹⁴を見直し、今回は亀岡市文化資料館を通じて、亀岡市内の全戸回覧板を利用して案内チラシを配布した。チラシの内容も子供を持つ若年夫婦層にも親しまれるよう前年度作成した筏漫画¹⁵ (写真 18) のイラストを全面に出した。

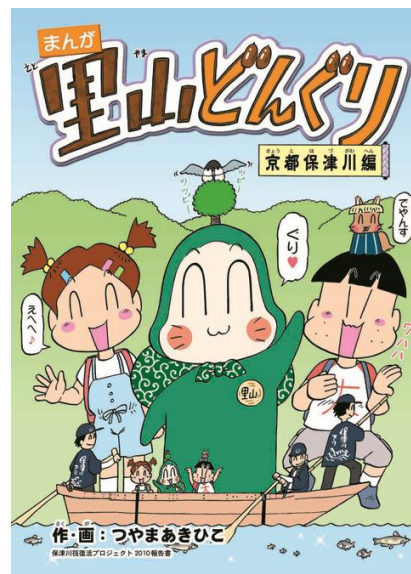


写真 18 まんが 里山どんぐり
京筏組提供

イベント直前の 9 月 3 日、日本列島を襲った台風 12 号の影響による河川の増水で開催も危ぶまれたが、この河川の増水が夏の渇水期に苔むしていた河原を洗い流し、透き通るきれいな河原を作りだした。自然の自浄作用である。河川利用の少ない昨今、河川の増水は洪水・氾濫をもたらす悪点だけでしかないが、参加者はこの自浄作用があらたな河川環境を作り出すことも再認識できたのではないだろうか。

当日は、夏日を思わせる日差しのもと、川の水位も減少し、絶好のイベント日和となった。私を含めた保津川下りの船士 4 人で筏を 3 連ずつ計 6 連組み上げ、他のスタッフはテントと展示物の設営を行なった。同志社大学のプロジェクト科目の学生 3 名がアンケート調査、京都学園大学歴史民俗学専攻の学生 20 人以上が準備とイベント進行に参加するなど大活躍してくれた。

参加者は、受付、アンケートに答えた後、ライフジャケットを着用して保津川を約 100m 往復した。約 10 分間の試乗体験である。参加者には試乗記念の京都府産材木製コースターと暑さ対策のかき氷が用意された。

試乗では、船士たちはあくまでも補助役に回り、参加者自らが筏を操れるようにした。初めて筏を見る人も多く、筏に乗る時は恐る恐るであったが、慣れてくると棹や舵で筏を操りながら、みな思い思いに筏を体験した。川の流れや筏の動きに委縮していた子供たちも自ら川に飛び込むなど、川面に楽しそうな歓声が響き渡った。



写真 19 保津川と筏と戯れる 京筏組提供

¹⁴ 従来は、各参加団体で個別に配布していたため、亀岡一円にくまなく配布するまでには至っていなかった。

¹⁵ つやまあきひこ、まんが 里山どんぐり～京都保津川編～、NP0 プロジェクト保津川、2011。小学生対象の保津川筏復活プロジェクトを紹介した漫画。

今回のイベントでも、京筏組メンバーの強みがいかに発揮された。河川の使用許可や安全管理等の手続きは京都府南丹広域振興局が、展示物の手配やチラシ配布等は文化資料館が、会場設営とイベント進行は NPO や学生たちが、筏組みと筏流しは船士衆がと、それぞれが自分の得意分野を受け持ち、対等な関係で参画した。特に学生たちが楽しみ学びながら参加してくれたこともイベントが成功した要因であろう。この活動が若年層へさらに広がることを期待してやまない。

川で遊ぶことをことさらに危険視する昨今。しかし、かつて私たちは自然からものごとの理（ことわり）を学んだ。川は危険なものではなく、川はさまざまな恵みを運んでくることを。大人たちがしっかり連れ添えば、川は大いなる遊び場、学び場となることを改めて実感させてくれた。このイベントが、保津川に育まれた流域の歴史や文化、さらには環境をあらためて考える機会となれば幸いである。

10. 木材の嫁入り先

前述した筏イベントに使用した木材をただ放置しておいても意味はない。切り出された木材は、何かに利用されて初めてその価値が生まれるのではないだろうか。私たち（京筏組）は主に筏流しの木材として京都府産の間伐材を使用しているが、かつての木材利用がそうであったように、京都府産の木材を保津川流域で有効活用できないかと考えている。

ここで木材の嫁入り先探しが始まった。前述した亀岡の NPO の関係で、亀岡市篠町自治会が木材の受け入れを申し出てくれた。今、篠町自治会では、町内にある長尾山で里山事業を行っている。山を整備し、桜を植えたり、林道を設けたりと町民の憩いの場を作っている。私が長尾山を見分した限りでは、雑木山であり、あまり杉やヒノキなどの建築用材は見受けられない。筏流しで使用された木材は、山小屋、道標、林道等に毎年有効活用されている。また、京筏組には嵯峨在住のメンバーもいて、嵯峨地域でも有効活用されている。

ここでは 2 つの事例を紹介する。一つ目は、嵯峨の車折神社での活用である。その氏子であるメンバーによって、私たちと車折神社が結びつき、私たちの活動を理解された宮司の計らいにより、平成 21（2009）年の筏流しの木材が、当神社の大国主命を祀る社の鳥居と玉垣に活用された（写真 20）。二つ目は、京福電鉄での活用である。平成 20（2010）年、京福電鉄は開業 100 周年を迎えた。その記念として開催されたイベントのブースの机と椅子に筏の木材が活用された。

木材利用の一連の流れの中で、人のつながりによって、モノのつながりが生まれた。それが、さらなる人のつながりへと発展することは可能であろうか。1948 年の京都新聞の『下嵯峨のうた』「市の波紋」と題された記事の一節にその可能性を見出している。『「昔はな、丹波と下嵯峨ちゅうたら親類みたいなもんやった。今はもう、そんなつきあいしてるとこ、ないやろ」—古老はつぶやく。（中略）「イカダ流し」の輸送がトラックや鉄道にかわった時、人々は「何か血がうすうすなったみたいや」と



写真 20 車折神社内の大国主神社
筆者撮影

笑い合った。激流を命を張ってくだってくるその労苦が、お互いの心を通わせていたからだろう』。

このように、かつて、保津川の筏流しは、丹波と嵯峨を結びつけ、人々の心をも結びつけてきた。それは、保津川をフィールドとして、互いの地域が直接的な関係性を持ち得たからではないだろうか。筏流しによってもたらされる木材の活用は、山と川、山と地域、地域と地域、そして川と地域の関わりを可視的にする。それは、保津川の歴史的景観と地域住民とを結びつける一つの橋渡し役と言えるであろう。

おわりに ～私たちの保津川へ～

私は、現在の保津川の現状に危機感を持ち、この現状を打開するため、保津川と地域を結びつけ、新たな歴史的環境を生み出す橋渡し役として、筏流しを研究し、筏流しのイベントを行ってきた。しかし、当初は、筏流しの伝統技術をただ研究し習得してきただけであったように思う。「ほんまもん」の筏を研究し習得することは、新たな歴史的環境を生み出すのに必要不可欠であるが、それら自体が手段ではなく、目的化していたのだ。平成 20（2008）年から平成 22（2010）年までの伝統技術の見学会的なイベントは、私（京筏組）の伝統技術の習得と伝統技術の広報といった目的が重要視され、私から彼ら（地域住民）に伝統技術という知識を提供するという一方向的な関係でしかなかった。それでは、彼らは、筏さらには保津川に対し、受動的な関わりあいしか持てず、私と私たち（地域住民）は共有化されず、保津川の問題は、彼らの問題意識へとは発展しないであろう。

平成 22（2011）年は、当初、京筏組の中で筏 12 連の筏流しの再現や筏流しの見学ツアーの実施の提案などが挙がっていた。しかし、これでは前述した地域住民との一方的な関係しか生み出さない。私と彼らの間に、双方向的な関係を生み出すためには、両者が、同じ思いで、同じフィールドに立ち、同じ体験をしなければならないと考えた。

平成 23（2011）年のイベントは、前述の考えから生まれたものであった。私と彼らは、筏流しを、保津川を楽しむという思いで、主催者と参加者と言う立場を超え、共に筏と保津川と戯れる。私と私たちの共有化の始まりである。地域住民から「今回のイベントに参加できず残念だった」、「来年はどこでやるんですか」、「来年も参加したい」といった声が多く聞かれた。このように、体験型のイベントは、私と彼らとを能動的に関連づけるのである。これら能動的な関係が持続的になれば、筏流しの復活の先にある、私と私たちは共有化され、地域の問題意識の共有を促し、新たな地域の歴史的環境の創造へとつながるように思う。

最後に、古老の言葉を手掛かりに、再度保津川の筏流しの可能性について述べておこう。

上田氏は「技術を残すことは意味深いことやけど、もっと山や木の大切さを伝えていただければと思います」と言い、当時の興味深いエピソードを教えてくれた。かつて、嵯峨の筏の貯木場（現在の京都嵯峨芸術大学付近）では、筏をばらしたり、組み直したりする際、不要となったネソ、藤蔓、樫の木、木皮などが大量に山積みされていた。嵯峨の人々は、それらを焚き物（燃料）とするため持って帰ったそうだ。

上流の人々が、「命」がけで、山から木材を切り出し、運び、筏に組んで、川を下す。その木材は建築物等に、その付随物は燃料にと、下流の人々の「命」を支え、その灰は、畑の肥やしとなり、新たな「命」を育んでいく。そして、一連の仕事で得た糧は、上流の人々の「命」の支えとなった。筏流しはさまざまな「命」を紡ぎ、「命」をつなぐ架け橋だったのだ。それだからこそ、上田氏は、地域に

眠る山の財産をもっと見つめ直してほしいと願ったのではなかったか。

ここで、山を川に言い換えてみよう。川は決してごみを垂れ流すだけの排水路ではない。川は地域の人々の「命」を運び、育む場所であった。その「命」のつながりが、地域の歴史的環境を形作っていた。保津川の自然、風土、歴史、文化つまり歴史的環境を知るだけではなく、保津川を体感すること、それも私的体感ではない、地域共通の体感をすることを通じて、「ウチ」と「ソト」の関係性は克服され、保津川のアイデンティティ＝歴史的環境を大切に思う気持ちが芽生えてくるのではないだろうか。

保津川の筏流し復活の試みは、そんな可能性に満ちた試みである。私たちはそれを通じて、地域住民が、筏流しの本来持つ「地域性」「歴史性」「連鎖性」「真実性」を認識し、筏流しのイベントを通じて保津川を体感し、あらたな保津川の歴史的環境を紡いでいくことを期待してやまない。私たちの試みは始まったばかりである。私たちは地域のさまざまな歴史的環境とリンクしながら、新たな歴史的環境を地域とともに創造していかなければならない。

保津川には、まだ見ぬ宝物が埋まっている。

謝辞

保津川筏復活プロジェクトに関わって、4年の年月が過ぎようとしている。私の活動は、決して研究者一人で成し得るものではなく、京筏組を始め、地域の諸団体、各種関係団体の多くの方々の協力の下で行われたものであり、この場を借りてお礼を申し上げたい。また、上田潔氏、酒井昭男氏、栗山季夫氏、片井操氏、田中利一氏、畠良一氏といった諸先輩方からは、ご高齢にも関わらず、時間の許す限り貴重なお話を伺うことができた。皆様方の熱意に敬意を表するとともに改めて厚くお礼を申し上げる。そして、保津川さらにはこの流域に生きる人間として、保津川とその流域に対し、感謝と責任を胸にさらなる精進をしていく決意を申し上げて感謝の言葉に代えたい。最後になったが、陰日向となって支えてくれた最愛なる家族に感謝を申し上げて筆をおくこととする。

参考文献

藤田叔民 1948 『近世木材流通史の研究』 新生社:65, 166-167.

京都府南丹市日吉町 1987 『日吉町誌（上巻）』 :216.

京都府亀岡市地域資源活用実行委員会 2011 『大堰川の筏をめぐる民俗技術』: 51.

安藤和雄 2010 「実践型地域研究に関する覚書」 鈴木玲治編『ざいちのち 実践型地域研究中間報告書』 京都大学東南アジア研究所 実践型地域研究推進室:1-5.